
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 147 号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2004.11.25 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1473 部*****

□ 目 次 □-----

<今週の提言>日本一のコメどころの食料不足 松坂正次郎

<旬を食べる—野良からの便り・12> “アケビ” 小泉浩郎

<79歳の意見>杖の使い方(私の場合) 原田 勉

<山崎農業研究所情報>

◇NHK BS1「滅びゆく生き物を救えるか」に山崎農業研究所会員が出演

◇第114回定例研究会速報(その1)

1. 耕地はなぜ遊休化するか、有効利用に何が必要か

——鯉渕学園教授 笛木 昭氏

<エッセイ>モーツアルト、聖歌、般若心経 安富六郎

<編集後記・同人の近況報告>11月12日~11月24日

<今週の提言>日本一のコメどころの食料不足

TVや新聞が新潟県中越地震の報道で、ライフ・ラインが崩れ、被災者は食べものにも困っているとあったのに違和感をもった。北海道に次ぐ全国第二のコメどころ、しかも「魚沼コシ」「岩船コシ」「佐渡コシ」のご三家銘柄米産地で、食うものがないとは！ 県庁は地震の前の台風豪雨による水害の際に備蓄食料をすっかり支給に回したので底をついたと説明していた。備蓄量の不十分さの背景には(1)わが県は有数の米産地である(2)全国的に米余りで減反している(3)スーパーや食料品店でも食べものが溢れている、といった意識があったと思う。

地震といえばまず住む家の崩壊、道路や橋の破壊に目が行くが、農山村の場合には山崩れや土石流、河川・水路の堤防決壊やダムの崩壊、田畑や農道の埋没

という経営の基盤が破壊されることだ。しかも時期が悪い。新潟県は豪雪地帯であり、寒さも厳しい。政府も救農土木事業を開始したが、果たして来春に間に合うのか。政府開発援助（ODA）で途上国にダムや水路や道路や橋を造り、農地開発などでも大いに稼いだゼネコンや下請企業はこのさい、ノウハウを全開し、“祖国の国土修復”に最大限の奉仕的活動を期待したい。

次の課題は気象庁から「地震庁」を独立させ（あるいは「気象・地象庁」、もしくは「気象・地震・火山庁」に改称して、連係させる）、もっと地震のメカニズムの究明と、台風襲来時に勢力・進路・風速・降水量などを予測して発表している台風情報並みの確度の高い地震情報が出せるようにしてもらいたい。付け加えると農水省の「売れる米を売れるだけ作れ。売れ残ったら減反を増やさせる」という指示が、「備蓄無用」の意識をもたせたのではないか。政治に“短慮”は罪悪である。

松坂 正次郎

山崎農業研究所会員、「農政と共済」コラムニスト

y.noken@taiyo-c.co.jp

<旬を食べる―野良からの便り・12> “アケビ”

「小さい時は男で大きくなると女になるもの、なーに」。「あけび」。子供の頃のたわいもないナゾかけ遊びを思い出す。

遊び仲間は、どこにアケビあるか、今年はいくつなつたかだいたい知っていた。ルールがあった訳ではないが、1人でこっそりということはなかった。問題は、いつ食べられるようになるかだ。早すぎては苦いし、遅すぎると野鳥にやられてしまう。女に変わるタイミングを逃さず採ることが大事だ。

遊び仲間2〜3人でツルを手繰る者、木に登る者、下で拾う者、それぞれ役割があった。下級生は拾い役だ。すっかり開いてしまったものより、紫色の皮が縦に白く筋がつき、一個所かすかに割れ、中の実がほんの少し見えるものがよい。

1人に2〜3個配られたアケビを、土手に並んで座り、両手で縦にそっと割ってかぶりつく。大部分は小さい真っ黒な種子だが、上品な甘さが口の中一杯

に広がる。秋の夕暮れは早かった。

アケビは、場所によっては食べ方や用途も多い。以下は、インターネットからの情報である。

部位…利用方法

新芽…木の芽と呼ばれ、古くから春の山菜として珍重される。

果肉…生食として菓子類にはない上品な甘さあり。

皮……刻んで味噌炒めにしたり、中に味付けした挽き肉やキノコなどを詰めて蒸し焼きにしたり、油で揚げて食べる。

つる…漢方薬で木通（利尿、鎮痛、排膿）、つる細工の材料

種子…漢方薬で木通子（利尿、鎮痛、排膿）

小泉 浩郎

山崎農業研究所事務局長

y.noken@taiyo-c.co.jp

<79歳の意見>杖の使い方（私の場合）

10月16日、整形外科で変形性脊椎症と診断され、左足の麻痺も再発したので杖を使うようにしました。

◆1、杖は良い足の側につくこと

階段を昇り降りするとき、左右の足の力をみると明らかに左の脚力が弱っていました。特に階段を降りるとき、左足に力が入らず、よろめきそうになるのです。

杖をついてみると、左足の弱いのを右足がカバーしていることが解ります。右側に杖をついて歩けば体重の何割かを杖に分散できるのです。だから、右手に杖を持ち右足の側につくのが正しいのです。

悪い使い方は、弱い足と同じ側に杖をついて歩くことです。これでは弱い足に体重がかかって何の補助にもならず、危険です。

◆ 2、階段は1段ずつ、両足を揃えて昇り降りすること

健常者に比べれば、めんどろです。しかし、足腰が弱くなったから、それに
つき合って行かねばなりません。

階段を昇るときは、杖を一段上に突き出して、良い方の足から昇り、次に
悪い方の足を揃えるように、一段に2足の足を揃えて昇ることです。人の眼を
気にせず一段ずつゆっくり昇ること。

階段を降りるときは、杖を一段下に出し、悪い方の足から降り、次に良い方
の足を揃えるように一段ずつゆっくり降りることです。足の弱い人にとっては、
下り階段は危ないのです。

時間は倍以上かかります。杖を使うときは時間の余裕を見て行動すること
です。

バリアフリーのある駅では、若者があまり使わないエレベーターを使い、
第二にエスカレーターを使うことです。

駅の階段はたいてい両側に手すりがありますが、もう一本中央に昇り下りの
手すりを設置して貰いたいものです。利用者はぜひ駅長に要求して頂きたいと
思います。

◆ 3、バスに乗るときは、必ず杖を持って

高齢になって分かったことは、こんなに揺れて不安定な乗物は無いという思
いです。ゆれるバスの優先席には必ず杖をもった高齢者がおられます。

杖をついて立っておられる方も多し。つかまる支柱が無い所もあり、吊革だ
けでは老人には無理です。足腰がしっかりして腕に力がある健常者は良いが、
バスに乗るときは必ず杖を使った方が良い。

手には荷物を持たないで、片手で柱や吊革につかまり、もう一つの手で杖を
持って足腰の安定をはかることです。

私は、混んでいるバスはもう一便待って、空いたバスに乗るようにしていま

す。

バス会社への要望は、優先席をもう3つ増やしてもらいたいことです。そして、若い健常者は出入口の柱につかまらないうで、奥に入ってもらいたいと思います。

◆ 4、杖の長さ

ふつうは身長の半分プラス3cm程度（156cmの人なら、78cm+3cmで81cm程度）といわれています。

しかし、歩く姿勢や動作、それぞれの人の腕・脚の長さによっても変わります。

杖を持つ側の手首の付け根までの長さが良いとされています。

各人が歩くときに、肩や手首が自然に動く長さが良いでしょう。

杖を売っている所は、デパートの紳士雑貨のコーナーか、介護用品コーナーにあります。

介護用品コーナーには、多点杖といつて3点式や4点式の接地面の広い安定度の高い杖などいろいろあります。

参考図書 武藤芳照『武藤教授の転ばぬ教室-寝たきりにならないために』
暮らしの手帖社 2001年刊 1619円+税

<http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=01030572>

- 主な目次
- 1、死ぬまで元気でいたい
 - 2、人が転ぶ・・・転倒事例いろいろ
 - 3、転びやすい人
 - 4、転ばないために
 - 5、転んでも起きればよい・治療とリハビリ

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田勉

<http://nazuna.com/tom/>

<山崎農業研究所情報>

◇NHK BS1「滅びゆく生き物を救えるか」に山崎農農業研究所会員が出演

山崎農農業研究所会員（顧問）の中川昭一郎氏が、NHKBSディベートアワー（討論番組）に、4人のディベーターの1人として出演されますのでお知らせします。時間があつたらご覧の上、感想などお聞かせ下さい。

チャンネル：NHK BS1

テーマ：「滅びゆく生き物を救えるか」の後半の第2部

「日本の自然は再生できるか？」

（主に自然再生と農業の関係が論議されます）

日時：11月28日（日）23：10～24：00（50分間）

再放送：12月4日（土）13：10～14：00

ディベーター：中村太士、ケビン・ショート、
立松和平、中川昭一郎

BSディベートアワー公式サイト

<http://www.nhk.or.jp/bsdebate/>

今、11月のテーマ掲載中。

中川昭一郎氏の写真とプロフィール・詳しい主張は、

<http://www.nhk.or.jp/bsdebate/0411/guest.html#nakagawa>
に掲載されています。

◇第114回定例研究会速報（その1）

2004年11月6日 太陽コンサルタンツ会議室 20名参加

〔講演要旨〕

1. 耕地はなぜ遊休化するか、有効利用に何が必要か

——鯉渕学園教授 笛木 昭氏

戦後の農地改革によって創設された日本の自作小農体制は70年代～80年代に終焉を告げたといえる。自作小農体制の終焉に伴い、世界的な自由貿易体制のなかで存立しうる農業の確立と遊休農地の市民的解決が課題となっているが、内側からの改革は進んでいない。

小農制（Peasantry）から近代的な農業経営体（Farmer）になるのに長時間を要した欧米とは異なり、急速な経済発展が進んだ日本では多くの矛盾がある。これがいま遊休農地となって現われている（ここで言う遊休農地とは耕作放棄農地と不作付農地合計をいう。2000年 62.3万 ha）。この矛盾を解決するにはもう一回、農地改革が必要である。

1961年の旧農基法以降、農水省は自立経営（小農型自立経営）を助けた。日本の農業は小農による生産の上に成り立ってきたが、これは、小農は農業所得は零細であっても、その全所得は優位性を持っていたからである。しかし1968年以降は小農の所得が減少し、この状態が続く中、80年代までに自作小農体制が崩れたのである。

昭和30年代には農地が大きい農家ほど農業所得が多かった。しかし1980年代に逆転が起こった。大農ほど農業所得が減少した。1970年代以前には後継者はあったもののそれ以後は消滅に等しい。貧しい農業に留まる必要はないと農家自身が思うようになったのである。食料を支えるという社会的義務感は減退した。金さえあれば食料は買えるという意識がこれに代わった。

WTO体制の中で新しい自立農業、すなわち産業型自立経営が注目されている。これは付加価値を加えた生産である。これには大規模な資本投下と新しい技術開発が必要となるが、大規模な土地は必ずしも要らない。現在60万 haの農地が遊休化している一因もそこにある。

いま問題なのは専業農家の激減と高齢化である。この問題に対処するには次のことが望まれる。

- (1)産業型自立経営の育成。この担い手養成のために農地を荒廃させないこと。そのために、農業委員会に強力な権限を持たせ、耕作権の集約を図ること。遊休農地に割高な税金をかける。現状で放置すれば遊休農地は今後増える一方である。
- (2)市民農園の育成。西日本では定着の方向にあるが、今後これの法人化が望まれる。
- (3)WTO交渉にわが国の歴史的背景を考慮してのぞむこと。
- (4)都市問題からくる農地のゆがみを是正すること。欧米では土地問題は自治体法として処理されている。土地の公共性を重んじた政策が望まれる。

（文責：安富・田口）

<エッセイ>モーツァルト、聖歌、般若心経

最近面白い本を読んだ。その本の題名は「モーツァルトを科学する」である。著者はアルフレッド・トマテス。フランスの精神科医である。翻訳も立派で読みやすい。内容は要するに精神のやすらぎを求めて音楽を聴くとき、名曲でも逆効果になるものがある。しかしモーツァルトの曲の多くは心の安定剤としてよいというのである。たしかにモーツァルトの音楽には神の存在すら信じたいくなるほど、心に安らぎを与えるものがある。この精神科医によれば、この他にも一つ、効果のあるものは「グレゴリオ聖歌」であるという。さっそくCDを探して聴いてみた。極めて単調でこれでも歌と云えるかと思える。一種のお経である。

アメリカからのおみやげにもらったパソコン用CD世界地図 (ENCARTA99) が手元にある。この地図には国々の地理的な文化が紹介されている。その中に各国、各地域の代表的な音楽が聴けるようになっている。たとえば中国では雲南民族の民謡などを含めて地域ごとの音楽が吹き込まれている。東ドイツ地域ではベートーベン第九の合唱「歓喜の歌」、スイスではヨーデル、東部シベリアでは一本弦楽器が奏でる哀愁の歌である。

日本では何が出てくるだろう。「箱根の山」？「隅田川」？ではなく、「尺八古典本曲」と「般若心経」なのである。外国人が日本の心を示す代表的リズムとしてお経を挙げている。まさに驚愕である。これも音楽なのであろう。リズムは「グレゴリオ聖歌」と似ている。お経には昔から心を休める効果があると言われきたが、科学的な分析を待たなくても納得できる。お経が近代音楽に影響をあたえているともいわれるが、西洋の聖歌に通ずるところがあることに驚きを禁じ得ない。

世界には環境破壊、飢餓、殺人、道理も理論もない戦争が生じている。神様はこれらの狂った人間どもに「この辺で、いいかげんにせい！」と言っているようである。少しはこころ安らぐお経、聖歌や、モーツァルトでも聴いて人間の心を取り戻したいものだ。

安富 六郎

山崎農研会員 電子耕編集同人

y.noken@taiyo-c.co.jp

<編集後記・同人の近況報告> (11月12日～11月24日)

新潟県中越地震の発生から1か月が過ぎた。新潟県といえど今週の提言>で松坂正次郎氏が触れているように、日本でも指折りの銘柄米産地である。しかし、水田・用排水路・ため池・農道等の破損は深刻であり、来春の作付けに復旧が間に合わない地域も多い。こうしたなか、平野部の遊休水田を被害地域の農家に提供し、そこでの耕作をすすめることが計画されているという。米はつくらなくても生産装置としての水田を守るというのが、減反政策の目的のひとつであった。だが、その有効性がこのようなかたちで証明されようとは、政策をすすめた側も、受け入れた側も想像していなかったにちがいない。

(山崎農業研究所会員・田口 均)

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名(見出し)を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。

5、JIS X0208 規格外の文字(機種依存文字)のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 148号の締め切りは12月6日、発行は12月9日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 147 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2004.11.25（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』 *****